

第177回読書会レジメ

ラッセル『怠惰への讃歌』(平凡社文庫)

第11章 人間対昆虫

(戦争よりも) 多分最も重大な闘いは、人類と昆虫との闘争である。

大きい動物は、人類(人間)の生活をもう脅かさないが、小さい動物(昆虫、微生物等)は話が違う。

なぜ恐竜が死に絶えたかわからないが……。

(注)当時(1933年)は、現在定説となっている、隕石が地球に衝突したことによる恐竜絶滅説は知られていなかった。

哺乳類が最も優秀なるものになったので、しだいに形が大きくなっていった。

人間は、知力のおかげで、大きくなったにもかかわらず、大規模な人口を支える食物をうまく発見した。

昆虫の第一に有利な点は、その数が多いということである。……。昆虫の他の有利な点は、食物が人間が食べられるほど十分熟さないうちに食べることができる点にある。

幸いにも、科学は害虫を抑える方法を発見している。寄生虫による害虫の抑制及び害虫の「自然の敵」の発見。しかし、戦争が続く限り、一切の科学的知識は、賛否両面の働きをする。(例:「窒素固定法」は地力を増すが、爆薬製造にも利用された。)

次の大戦争の起きた時、昆虫や微生物の助けを求めれば、昆虫(あるいは微生物)が唯一の勝利者となることもありうる。宇宙的立場から考えると、これはなぜくには当たらないが、自分は人類の運命については嘆かざるを得ない。

=====

感想: 1933年前後の事件や出来事は?

昆虫について: 種類は百万種以上

それでは数は?

一番繁殖している昆虫は?